KELES Newsletter

関西英語教育学会報 2022年度 第1号

事務局：〒603-8555 京都市北区上賀茂本山
京都産業大学 外国語学部 平野亜也子研究室内
E-mail: kelesoffice@gmail.com　学会ウェブサイト: http://www.keles.jp/

2022年7月25日発行

巻頭言
関西英語教育学会（KELES）会長2期目を迎えるにあたって

泉 惠美子（関西学院大学）

梅雨の真っただ中，6月11日，12日に関西英語教育学会2022年度研究大会が開催されました。多くの会員の皆様にご参加いただき，時間も忘れる魅力的なプログラムやご講演に胸躍り，明日からの指導や評価に多くの示唆を得ることができました。ご多忙の中，誠心誠意ご準備くださった講演者・発表者，そして企画・運営にご尽力いただきました幹事をはじめ，関係各位に心よりお礼を申し上げます。また，会員総会にてKELES会長として再任され，身が引き締まる思いが致しております。未熟者ながら責務を果たすべく精進して参りますので，会員の皆様の温かいご支援・ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

なお，任期満了でご退任されました橋本健一幹事長兼副会長をはじめ，水本篤紀要編集委員長，幹事，理事，紀要編集委員の皆様，4年間KELESのために，多くの時間と労力を割いてご奉仕いただきましたことに敬意と感謝の意を表したいと存じます。本当に有難うございました。またご多忙の中，新たにご就任されました役員の皆様にも心よりお礼を申し上げます。コロナ禍がまだ終息しない状況でオンラインでの学会運営が続いておりますが，一日も早く会員の皆様と対面でお目にかかり，笑顔で語り合えますことを願ってやみません。

現在は，コロナ禍に加え，地球温暖化や自然災害，人間が始めた戦争で世界が不安に陥り，大切な命が失われております。英語教育は，人権，平和，環境，国際理解，科学技術，コミュニケーションなどをテーマに，人格形成，世界の平和と人類の幸福などを追求する教育の一翼を担うものであると存じます。このVUCAの時代における将来を見据えた教育の在り方を考え，OECD Education 2030の学びの羅針盤でも示されている学習者の幸せwell-beingの実現のために，学習者が主体となり，周囲の人々と関わりながら，自ら粘り強く学び続けることができる支援をすることが教育者である我々の使命でもあると考えます。

今年度から高等学校で新学習指導要領が導入され，小中高一貫した英語教育改革の本格実施となりました。一方，教育DXが進む中GIGAスクール構想により，一人一台端末がほぼ実現し，デジタル教科書も導入されました。しかし，「誰一人取り残すことのない公正に個別最適化され，創造性を育む学びの実現」のためには今後多くの実践や研究の積み重ねが求められることでしょう。理論と実践の融和と往還や実践研究の広がりと深化など

が必要です。

KELESは，研究大会，年3回のセミナーやワークショップ，卒論・修論研究発表セミナー，学会誌『英語教育研究』，KELESジャーナルやニューズレターの発行をはじめ，これからも英語教育学の構築をめざし，持続可能で創造的・発展的な学会として，皆様の教育実践や研究の交流と発表の場となり成長のお手伝いができればと願っております。Kansai English Language Education Societyの頭文字であるKELESは，We love Knowing, Engaging, Learning, Empowering and Studying.とも言えるかもしれません。ビジョンと先見性を持ち，行動の人でもあったWalt Disneyは，“First, think. Second, believe. Third, dream. And finally, dare.”と述べています。皆様がそれぞれの場で仕事に誇りと喜びを持ち幸せな日々を送られますよう，そして英語教育を通して思考を深め，夢を語り，自分を信じて行動できる人を育てることができますよう，互いに尊重し楽しく学び合える温かい学会であり続けたいと存じます。引き続きよろしくお願い申し上げます。

報告　関西英語教育学会2022年度（第28回）研究大会

開催日：2022年6月11日(土)・12日(日)　オンライン開催

2022年6月11日(土)・12日(日)に，第28回となる研究大会が開催されました。新型コロナウィルス感染症の影響が続く中ではありましたが，渡部良典先生によるご講演をはじめとして6件の企画ワークショップや4件の研究発表・事例報告があり，盛会のうちに終了しました。事前参加登録と講師の先生方をあわせて約120名がご参加くださって，Zoom上の限られた中ではありましたが，活発な議論が展開されていました。

講師をお引き受けくださった先生方をはじめ，ご発表くださった皆様，参加してくださった皆様，準備段階・当日とご尽力くださった役員の皆さまに心から感謝申し上げます。なお，当日のプログラム・発表概要等の詳細については，年次大会特設ウェブサイト（https://sites.google.com/view/keles2022）をご覧ください。

講演

学習者のためのアセスメント・リテラシー

渡部 良典（上智大学）

ご講演の冒頭，渡部先生はなぜ学習者もテストの基本を知る必要があるという考えに至ったのか，説明があった。その前提として，学習者の学びにつながる波及効果の生成モデルが示された。そのモデルによれば，学習者の学びは教師による要因だけでなく，学習者による要因（メタ認知や学習方略）も関係しているという。渡部先生は，テスティング研究を踏まえ，学習者が言語テストに関するリテラシー，つまりテストの基本を知っていることで学びの波及効果が生まれるのではないかと考えられた。

そこで学習者にアセスメント・リテラシーを伝える実践を始められた。対象は主に高校生・大学生であり，小テストや定期テスト，外部試験や入学試験を対象のテストとしている。ご講演の中で渡部先生は，学習者に語りかけるように説明をされた。受験準備で英語運用力を身につける10箇条として，1. テストは万能ではない，2. 得点には必ず誤差がある，3. 得点の意味を知る，4. 自己評価を習慣にする，5. 言語習得は曲線に進むが，テストは曲線ののびを捉えるのが不得意，6. 他人の作文から学ぶ，7. 少し上のレベルにチャレンジする，8. ～の「せい」にしない，9. 役立つ受験準備方法と役立たない受験準備の方法がある，10.英語を使って他教科の勉強をしてみることがあるという。その中で，学習者目線に立った説明がなされていたのが印象的であった。例えば，信頼性にはテスト問題や実施環境，採点方法だけでなく，受験者の状態（例えば体調，やる気，感情）も関係することが述べられ，そのアドバイスとして生活を乱さないこと，前

日はゆっくり眠ること，詰め込みはしないこと，といった実践的な話があった。また得点の意味については，渡部先生が中学時代に受けられたテストおよび採点結果が例示されていたことで，より親近感を持ってご講演を拝聴することができた。

上記の実践により，受講された学習者は，テストが嫌だといった試験への「主観的な」感想から，テスト結果の信頼性を確認することが必要だといった「客観的な」感想を持つことができるようになるなど変容が見られたとのことだ。学生の時にこのようなレクチャーを受けることができていれば，と思ったのは私だけではないに違いない。

（報告者：神戸市立工業高等専門学校　南 侑樹）

企画ワークショップ

英語絵本と小学校英語
ー絵本で出来ること・その指導と評価ー

田縁 眞弓（京都光華女子大学）

今回のワークショップでは，小学校での英語絵本の読み聞かせを取り上げ，授業の中で絵本をフォーカスしながら，どのように使い，何ができるかをお話し頂き，絵本が早期英語の学びを促すということを実践とともに解説された。

前半は，絵本の効果と学年ごとの選書のヒントを提示して頂いた。絵本の中で繰り返し現れる表現がリズムや語彙の学習に効果的であることに加え，ストーリーを推測しながら理解できる，という点に特に注目し，絵本が「意味のある文脈」の中で言語を教えることができる非常に優れた教材であり（アレン玉井, 2020），子どもたちの自然な発話を促すことのできる教材でもあるということを強調された。また，効果的に活用するために，児童の発達段階を考慮するなどの留意点とともに，子どもにどんな力をつけたいかという「ゴールの明確化」が，指導だけでなく選書の上でも非常に重要であるということを，実際の本を手に取り紹介しながら示された。例えば，低学年には繰り返しが多く，体を動かしながら聞けるものを，中学年には音と文字に注意を向けるもの，高学年には考えさせるものをそれぞれ選ぶことで，どの学年の子どもたちにも興味関心を持たせることができるということを見せて頂いた。

後半は，インタラクションの必要性を取り上げ，実際の読み聞かせを取り入れながら，TTの取り入れ方，担任の役割，読む際の注意点や，読み聞かせ前後と途中でどのようなインタラクションが可能か，それにより子どもたちをいかに参加させるかを，具体的な実践を交えて説明された。また，パワーポイントなどの工夫次第では，絵を通して培われた力が，子どもたちの「読み」の力となり，「音への意識」から，「文字への意識」に発展させることができることがわかった。さらに幼稚園での実践から，「書くこと」に繋げる方法をご紹介頂き，聞く，話す，読む，書くのすべてに有効なまさに万能な教材であると実感した。

ワークショップを通して，ただ絵本を読むだけでなく，何をインプットし，アウトプットさせるか，どのように子どもにやる気をおこさせるか，というストラテジーを教師が身に付けることが大切であるが，それが難しいことではないこと，教師の語りかけにより，楽しく言葉を学ぶ子どもたちを育てることができるということを学ばせて頂いた。絵本で悩んでいる教員に，悩むよりやってみて下さい，と背中を押して頂いたようなワークショップであった。

（報告者：関西学院大学　斉藤 倫子）

論理・表現の授業でディベート実践 ー生徒の思考力と表現力育成のために教員ができることー

三仙 真也（福井県立藤島高等学校）

普段の授業にディベートを取り入れてみたいと考える教員は多いだろう。ディベートをどのように取り入れれば授業の中でうまくいくのか，その具体的な方法を知ることは重要である。今回の三仙先生のワークショップからは，その方法論のみならず，英語の授業におけるディベートを学習者にとって「取り組む価値があるもの」にするための心得を知ることができた。三仙先生が挙げてくださったディベートの有効性は，「自己関与度を高めて取り組むことができる」，「論題や題材に肯定否定の両面から考えることを通じ，自分の考えを客観視できる」，「エッセイライティングにおけるディスコースマーカーの使用や考えの対比において，有効な語彙使用ができる」という3点であった。これら3点からディベートが学習者にとって意味のあるものにするためには，次のことに気をつけるべきだと考えることができる。1点目は，一見学習者にとって身近でないトピックでも，教師は学習者がそのようなトピックについて学び，考えを深めていけるような工夫をする必要があることである。2点目について，例えば一方の立場だけではなく，逆の立場でも論じたり，ディベート前後のライティングの比較などを通して，どの程度考えが深まったのかなどを可視化したりすることが望ましいと言える。3点目は，聞き

手や読み手を意識したり，相手が述べたことに対する反応を表現したりするため，語彙表現を豊かにできる豊富な機会があるため，それらを活用した言語指導を行うことが重要である。これらを踏まえることで，「単なる活動」としてのディベートから，三仙先生がおっしゃる「学習者の表現力と思考力を育む意味のある活動」としてのディベートにすることができるのではないだろうか。恥ずかしながら，私は英語の授業におけるディベートを前者として捉えていたため，三仙先生のワークショップは，私にとっては目から鱗の学び多き内容だった。

（報告者：龍谷大学　今野 勝幸）

通じるという喜びと驚きともっと上手くという叫び ー「実践的」とは比べものにならない「実体験」ー

若林 茂則（中央大学）

ワークショップの冒頭で，日本の英語教育はテストに重点を置いてきた結果，英語ができる＝テストでいい点を取れるという実態を作ってしまった，という問題を指摘された。そして，若林先生が代表理事を努めていらっしゃる「ことばの学び工房（WILL）」における「にこP」の取り組みを紹介された。日本と海外の高校生同士が意見交換をするこのプログラムでは，「割とできたけど，もっとやりたい」と生徒自身がワクワクしながら英語を話す姿が特徴的である，と話された。

先生が流してくださったインドネシアと日本の高校生の実際の交流の録画ビデオからは，通常の授業とは異なる自然な英語のやりとりが見られ，これこそが英語を話す目的であり，日本の英語教育が向かうべき方向だと再認識した。また，このプログラムに参加した日本人高校生のインタビュー動画が，特に印象的だった。彼の「bubble teaがタピオカティーのことだと知らなかったが，何度かやりとりをしてやっとわかった。母語だと一瞬で終わってしまうため，記憶に残らないだろう。しかし，他言語で他文化の人たちと話すことで，深く記憶に残るし，とても有意義な国際交流だと思う」という感想から，こういった活動だからこそ，学習者は英語を話す真の目的を認識できるのだと感じた。

最後に，フロアからの質問「ノンネイティブの英語を聞き取れない時に，どうするのか」に対し，「ノンネイティブ同士で，お互いに不自由な英語を使ってわかりあうことが大事。ネイティブが相手だと，ネイティブの英語が全て正しいことになってしまうから」というご指摘をされた。これは，日本人が抱いているネイティブ信仰に通ずるものであり，日本の英語教育および授業のありかたなどを再考する機会となったのではないだろうか。理論と実体験の両側面からご説明いただき，非常に実りの多いワークショップであった。

（報告者：京都産業大学　平野 亜也子）

若手!?による若手のための授業のお悩み共有スペース

コーディネイター：泉 惠美子（関西学院大学）
進行：南 侑樹（神戸市立工業高等専門学校）
山形 悟史（関西大学第一高等学校・第一中学校）

本ワークショップは新進気鋭の若手である南先生と山形先生，それから元若手代表（というのもおこがましいが）の泉先生のご発表の後でQ&Aセッションという流れであった。山形先生はご専門である語彙習得ストラテジーの研究を挙げながら，実際に多くの学校で行われている指導方法に問いを投げかけ，中学生の例を挙げながらゲーム的に語彙と文法項目を「気づき」に注目しながら授業構成にまで言及されながら説明された。中学校や小学校では現行の指導要領で語彙が増え，これまでよりも校種間の接続がさらに重要となっているなかで，語彙指導の方法に悩まれている先生への素晴らしく即効性の高いヒントをたくさん共有された。今後の発見も是非，現場に届く形での共有も続けていただければありがたい。南先生は即効性というよりは，長い目で見た時の授業改善について教師の振り返りという観点からお話しされた。特に，学習者の学習ログと教師の授業ログを残すことについて例を挙げて説明された。Teaching journalは私も挑戦中であるが，続けるのが難しいと感じていた。南先生にいただいたヒントを参考に今後も書き続けていこうと勇気づけられた。また，揺れる教員の質保証（教員免許更新や臨時免許など）の時代に１つ教員研修としてのTeaching journalは基本中の基本であるが体系化が難しいが，それが果たされると今後の教員研修がより実のあるものになるのではないか。泉先生は授業の流れをそれぞれSLAの理論的フレームワークを縦断的にタグ付けながら教室内で行う活動の理論的な裏付けを丁寧に説明された。英語教師は文学・言語学・教育学など英語という言語に対しての背景が異なる人々が学年や科目でチームを組まなければいけない。その際に言語知識は当然のことながら習得研究の結果を踏まえた教育法の熟知は不可欠である。山形先生と南先生の橋渡しとなるご発表であった。

（報告者：大阪公立大学工業高等専門学校　谷野 圭亮）

英語のクラスを探究/研究活動の発信基地に！：「プロジェクト発信型英語プログラム」の実践から見えてきたこと

山中 司（立命館大学）

まずは英語教育そのものが大きく変わる潮目を迎えていることを提起された。入試で外部試験を取り入れる大学が出てきていること，そしてテクノロジーの発展によって自動翻訳が学習者の手に届くところにまで広がり，writingやspeakingを中心に，授業を取り巻く環境がここ数年で劇的に変化してきているとのことであった。またこう言った変化に我々英語教員がどこまで対応できるのかについて，またこの変化への課題意識が希薄な点についても危機感を持つべきと示唆された。

プロジェクト発進型の英語教育について今回は，その細部ではなく，背景についてお話をいただけた。社会ではCEFRのB2レベルの学習者が求められているが，現実はB1どまりということ。また，deepLなど機械翻訳を使用する学生たちに対して，大学として提供できる英語授業は何かを考えた時，現状を打破することが出発点とのことであった。
日本人が英語をマスターできないことに関しては，英語を使う必然性を授業内で設定することの難しさや，日本人英語学習者たちの完璧主義な精神性を例示された。目の前の学生たちが自分達の英語力や状況を受け入れ，やりながら上手くなるように働きかけること，できる実感を沸かるようなタスク設定，自分の興味・関心を大切にさせること，できないことは無理をせず割り切る寛容性も大切にすることが重要とのことであった。

ワークショップの終盤では，従来のように英語教員から何かプロジェクトを与えて学習者がやらされる教育から，あくまでプロジェクトは学習者に任せた上で，我々教員は「表現の専門家」として彼らをサポートするよう，その役割を変容させてゆく必要性に触れられた。学校種ごとに英語教員に求められる役割は違えど，時代と社会の流れに遅れないよう，その時々で求められる英語力とは何かを我々が意識することの大切さを学ぶことができた。

（報告者：関西大学第一高等学校・第一中学校　山形悟史）

大学で行われている国際交流の取り組み ～オンライン国際協働探究の20年～

吉田 信介（関西大学）

吉田先生はコロナ禍のはるか前から，20年間ICTを利用した国際交流を進めて来られたこの分野における先駆者である。本ワークショップでは78ページに及ぶ資料をご準備いただき，社会的背景，英語教育に関わる理論，そして国際交流の意義をご説明くださった。

前半では，21世紀はVUCA（volatility　変動性，Uncertainty　不確実性，Complexity　複雑性，Ambiguity　曖昧性）の時代であるため，「OODAループ思考」の育成が重要だ，とお話された。この思考は，観察（Observe），状況把握（Orient），意思決定（Decide），行動（Act），ふりかえる（Loop）から成り立っており，これまで推奨されてきたPDCAサイクルやロジカルシンキングでは叶わなかった「迅速性」に対応できる利点がある。このお話を伺い，これからの英語教育には，運用能力の育成だけではなく「（迅速な）決断力」の育成を視野に入れることが必要で，即興性を必要とするディベート活動がその一役を担うのではないだろうかと考えた。

中盤では，人が交流する一つの理由として「社会脳」をご紹介くださった。「他者の利益を導く利他的行動」が自然に発生するのが「社会脳」の特徴である，というご説明を伺い，異文化間での協働作業で見られる助け合いは，社会脳が関係しているのだと納得した。

後半は，吉田先生が取り組んでこられた国際協働プロジェクトについてお話し下さった。本活動に参加した教員からは「考えを短時間で明確に伝えられるような工夫が成功」「自立的に前に踏み出す力と，英語で相手を説得する力を，現実の場面で実践」といった声があり，学生からは「創意工夫した自己表現ができた」といった声があった。これらの声から，本活動が「OODAループ思考」と「社会脳」の育成に寄与していると感じた。

お話全体を通して，「英語を使う場」が，今後英語教育の中で一つのキーワードになるかもしれないと感じた。先生の20年のご成果を凝縮してご説明いただき，非常に中身の濃いワークショップであった。

（報告者：京都産業大学　平野 亜也子）

報告　2022年度 関西英語教育学会総会

開催日：2022年6月11日（土）　オンライン開催

2022年度総会では，南侑樹先生（神戸市立工業高等専門学校・本学会幹事）による司会進行のもと，議長に長谷尚弥先生（関西学院大学）が選出され，2021年度活動報告および決算報告，会計監査報告，2022年度活動計画および予算案などについて報告・提案がなされ，承認されました。

1．2021年度活動報告

研究大会等

✦ 関西英語教育学会2021年度（第27回）研究大会

日程：2021年6月12日（土）～ 13日（日）
開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型研究大会）
内容：会員総会，講演1件，研究発表・事例報告10件，企画ワークショップ6件，公募ワークショップ1件，ランチョンセミナー1件

✦ 全国英語教育学会第46回長野研究大会

日程：2021年8月7日（土）・8日（日）
開催形態：オンライン
主催：全国英語教育学会（地区学会：北海道英語教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語教育学会・中部地区英語教育学会・関西英語教育学会・中国地区英語教育学会・四国英語教育学会・九州英語教育学会）
担当地区学会：中部地区英語教育学会
関西英語教育学会担当プログラム：
課題研究フォーラム（1年目）
タイトル：アクティブ・ラーニングを用いた英語による発信力の育成
コーディネーター：泉 惠美子（関西学院大学）
提案者：俣野 知里
（京都教育大学附属桃山小学校）
篠崎 文哉（大阪教育大学）
佐古 孝義
（京都教育大学附属高等学校・京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程）

セミナー・共催行事

✦ 関西英語教育学会 第51回セミナー
（全国英語教育学会英語教育セミナー共催）

日程：2021年9月26日（日）
開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型セミナー）
テーマ：複雑系理論から英語教育現場を考える

✦ 関西英語教育学会 第52回セミナー

日程：2021年11月7日（日）
開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型セミナー）
テーマ：外国語学習における暗示的・明示的知識の役割

✦ 関西英語教育学会 第53回セミナー

日程：2021年12月19日（日）
開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型セミナー）
テーマ：観点別評価―その本質と評価の実際

✦ 関西英語教育学会　第25回卒論・修論研究発表セミナー

日程：2022年2月11日（金・祝）
開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型セミナー）
内容：口頭発表16件・スペシャルトーク

紀要『英語教育研究』

第45号刊行（紀要編集委員会）

課題研究プロジェクト

「アクティブ・ラーニングを活用した英語授業」（プロジェクト・リーダー：泉惠美子（関西学院大学），研究期間：2019～2022年度，4か年）

授業研究プロジェクト

なし

広報・発行

- ニューズレター　年3回発行（7月，12月，3月：他メール配信）
- 紀要『英語教育研究』第45号刊行（紀要編集委員会）
- 学会会員情報誌『KELESジャーナル』第7号刊行

2021年度決算報告

2021年度の収入・支出は以下の表のとおり。原案通り承認されました。

関西英語教育学会2021年度決算報告書（案）

収入の部			
項　目	予算額（円）	決算額（円）	備　考
前年度繰越金	3,547,395	3,547,395	
年会費	2,500,000	2,604,000	全国英語教育学会年会費も含む
参加費	80,000	86,946	関西英語教育学会第27回研究大会、KELESセミナー（第51/52/53回）、第25回卒論修論研究発表セミナー
論文集	50,000	73,000	学会紀要SELT販売、論文掲載費、論文抜刷費用
その他	200,000	228,870	全国英語教育学会からの事務局補助費
計	6,377,395	6,540,211	

支出の部			
項目	予算額（円）	決算額（円）	備　考
通信費	500,000	441,173	各種郵送代（学会紀要、ニューズレター、切手代、その他）、HPサーバー管理費、振込手数料
研究費	1,000,000	690,310	講師謝礼、作業補助謝礼、ZOOM契約料、KELESジャーナル執筆料、その他
印刷費	1,000,000	911,942	紀要『英語教育研究』、KELESジャーナル、第25回卒論修論研究発表セミナー発表論文予稿集、学会封筒印刷
会議費	20,000	0	
交通費	80,000	0	
事務費	20,000	12,145	宛名シール、コピー用紙
全国年会費	550,000	566,000	2,000円×283名
予備費	30,000	0	
計	3,200,000	2,621,570	

収入総額	6,377,395	6,540,211	
支出総額	3,200,000	2,621,570	
差引残高（次年度繰越金）	3,177,395	3,918,641	

2022年　5月　20日
関西英語教育学会（KELES）会計担当幹事
山形　悟史
齊藤　倫子

諸帳簿照合の結果、正確かつ公正に執行され、上記に相違ないことを報告します。
2022年　5月　20日
会計監査
山本誠子
氏木道人

2. 2022年度活動計画

2022年度役員体制

会　長
泉 惠美子（関西学院大学）

副会長
横川 博一（神戸大学）

顧　問
沖原 勝昭（京都ノートルダム女子大学名誉教授）
織田　稔（元関西大学）
瀬川 俊一（京都府立大学名誉教授）
村田 純一（元神戸市外国語大学）
吉田 信介（関西大学名誉教授）

幹事長（副会長兼務）
平野 亜也子（京都産業大学）

紀要編集委員長
吉田 達弘（兵庫教育大学）

幹　事（7名）
浅羽 真由美（京都産業大学）
斉藤 倫子（関西学院大学非常勤講師）
篠崎 文哉（大阪教育大学）
染谷 藤重（京都教育大学）
濱田 真由（神戸大学）
俣野 知里（京都市立二条城北小学校）
宮崎 貴弘（神戸市立葺合高等学校）

理　事（15名）
門田 修平（関西学院大学）
佐々木 顕彦（武庫川女子大学）
里井 久輝（龍谷大学）
高田 哲朗（京都外国語大学非常勤講師）
竹下 厚志（神戸市立葺合高等学校）
照井 雅子（近畿大学）
中田 賀之（同志社大学）
名部井 敏代（関西大学）
西本 有逸（京都教育大学）
橋本 健一（大阪教育大学）
長谷 尚弥（関西学院大学）
平井 愛（神戸学院大学）
溝畑 保之（常翔学園中学校・高等学校）
大和 知史（神戸大学）
山本 玲子（京都外国語大学）

紀要編集委員（6名）
黒川 愛子（帝塚山大学）
今野 勝幸（龍谷大学）
菅井 康祐（近畿大学）
中西 のりこ（神戸学院大学）
牧野 眞貴（近畿大学）
三上 明洋（関西学院大学）

会計監査（2名）
氏木 道人（関西学院大学）
山本 誠子（神戸学院大学）

※ 同職位内では50音順

研究大会等

✦**関西英語教育学会2022年度（第28回）研究大会**
日程：2022年6月11日（土）・12日（日）
開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型研究大会）
内容：会員総会，講演1件，研究発表・事例報告4件，企画ワークショップ6件

✦**全国英語教育学会第47回北海道研究大会**
日程：2022年8月6日（土）・7日（日）
開催形態：オンライン
主催：全国英語教育学会（地区学会：北海道英語教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語教育学会・中部地区英語教育学会・関西英語教育学会・中国地区英語教育学会・四国英語教育学会・九州英語教育学会）
担当地区学会：北海道英語教育学会

関西英語教育学会担当プログラム：
課題研究フォーラム（2年目）
タイトル：ICTを活用した協働的で深い学びの構築
コーディネーター：
加賀田 哲也（大阪教育大学）
提案者：橋本 芳宏
（大阪教育大学附属天王寺小学校）
今西 竜也
（京都教育大学附属京都小中学校）
乾 まどか
（大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎）

セミナー・共催行事

*総会後決定した内容を反映しております。

✦ 関西英語教育学会 第54回セミナー

日程：2022年9月開催予定
開催形態：オンライン（予定）

✦ 関西英語教育学会 第55回セミナー

日程：2022年11月開催予定
開催形態：オンライン（予定）

✦ 関西英語教育学会 第56回セミナー

日程：2022年12月18日（日） 開催予定
開催形態：対面またはオンライン

✦ 関西英語教育学会 第26回卒論・修論研究発表セミナー

日時：2023年2月 開催予定
開催形態：未定

紀要『英語教育研究』

第46号刊行（紀要編集委員会）予定

課題研究プロジェクト

「アクティブ・ラーニングを活用した英語授業」（プロジェクト・リーダー：泉惠美子（関西学院大学），研究期間：2019～2022年度，4か年）

授業研究プロジェクト

「「指導と評価の一体化」の実践課題：小・中・高での事例研究」（プロジェクト・リーダー：今井　裕之（関西大学），研究期間：2022～2024年度，3か年）

広報・発行

- 学会会員情報誌『KELESジャーナル』2022年度内に第8号を刊行予定
- ニューズレター　年4回発行（7月，12月，1月，3月予定：他メール配信）

2022年度予算案

2022年度の予算案は次ページの表のとおり。原案通り承認されました。

関西英語教育学会 2022年度予算案

収入の部			
項　目	2021年度決算額(円)	2022年度予算額(円)	備　考
前年度繰越金	3,547,395	3,918,641	
年会費	2,604,000	2,600,000	全国英語教育学会年会費も含む
参加費	86,946	80,000	関西英語教育学会第28回研究大会、KELESセミナー(第54～56回)、第26回卒論・修論研究発表セミナー、業者展示
論文集	73,000	50,000	学会紀要SELT販売、論文掲載費、抜刷費用
その他	228,870	150,000	全国英語教育学会からの事務局補助費
計	6,540,211	6,798,641	

支出の部			
項目	2021年度決算額(円)	2022年度予算額(円)	備　考
通信費	441,173	550,000	各種郵送代(学会紀要、ニューズレター、切手代、その他)、HPサーバー管理費、振込手数料
研究費	690,310	1,000,000	講師謝礼、作業補助謝礼、会場費用、KELESジャーナル執筆料、研究プロジェクト経費、大阪高英研広告掲載料
印刷費	911,942	1,100,000	紀要『英語教育研究』第46号、KELESジャーナル第8号、第26回卒論・修論研究発表セミナー発表論文予稿集、学会封筒
会議費	0	20,000	会議諸経費(幹事会・理事会)
交通費	0	80,000	研究大会・セミナー、幹事・理事会、全国英語教育学会理事会旅費
事務費	12,145	20,000	会議用資料印刷代、名札代
全国年会費	566,000	550,000	2,000円×275名
予備費	0	30,000	
次年度繰越金	3,918,641	3,448,641	
計	6,540,211	6,798,641	

学会事務局からのお知らせ

◆関西英語教育学会　学会誌『英語教育研究』（SELT）第46号 投稿論文募集のお知らせ

関西英語教育学会では，学会誌　『英語教育研究』（SELT）第46号（2023年3月刊行予定）への論文投稿を下記の通り募集します。

2022年度に開催された第28回関西英語教育学会研究大会および全国英語教育学会第47回長野研究大会での発表論文が優先されますが，これらの発表を経ない論文についても，一定の枠内で審査対象となります。会員の皆様の多数のご投稿をお待ちしております。

投稿受付期限

2022年8月31日（水）22:00（午後10時厳守）

投稿にあたって

学会ホームページ（http://www.keles.jp/activity/selt/）の投稿要領を熟読し，テンプレート（英語・日本語）をダウンロードし，テンプレートに書かれている諸注意も熟読の上，テンプレートを用いて原稿を作成し，学会ホームページの投稿フォームから投稿してください。（投稿した日から3日以上経っても受領確認のメールが届かない場合は，お問い合わせフォームにて問い合わせて下さい。）

詳細は同封のフライヤーをご覧ください。

◆お問い合わせフォームについて

下記に関するお問い合わせは，学会ホームページのフォームから事務局にお知らせください。

学会費・学会誌・研究大会・各種セミナー・入退会・会員情報の変更・その他学会全般に関するお問い合わせ